
フェルダムト！EP.00 G.O.M 1 紅瞳の天使と黒髪の少女

羽沢 将吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フエルダムト！EP・00 G・O・M 1 紅瞳の天使と黒髪

の少女

【エピソード】

N7650C

【作者名】

羽沢 将吾

【あらすじ】

「フエルダムト！」ドイツ語で「くそつたれ」の意味を持つ台詞…世界を駆けずり回る最強のジャパニーズ・サラリーマンのガードマン稼業時代のエピソード、ここに公開！

「はじめまして、あの、なんてお呼びすれば良いでしょうか？」

俺の目の前に、クライアント雇用主の愛娘である少女が現れた。

長い銀髪ブランチナブロンドと真紅の瞳を持つその少女は

今まで逢つて来たどんな美女よりも美しく、俺は一目で少女に参つてしまつた。

「はじめまして、お嬢様。貴女のお好きな様にお呼び下さい」

「…では、熊小父様アンクルベアとお呼びしても宜しいですか？」

貴方は、大きくて優しい熊さんみたいだから！」

悪戯っぽく微笑む少女。その愛らしさにぶつ倒れそうだ。

「ご随意に。我が姫君。俺は今この時より貴女を命に替えて御護りします」

少女はおずおずと右手を差し出す。俺は跪き、少女の手の甲にキスをした。

白磁の様な頬を染める少女。そして俺は、少女の守護者ガードマンとなつた。

「ベア、モンキー、お願ひが有るの…」

瞳に涙を溜めた少女が俺達の元を訪れた。

彼女の後ろに彼女付きのメイド、セラが困ったような表情で立つてゐる。

俺がお嬢様のガードとなつて三年が経つ。

歳を重ねるごとに美しくなつて行く少女は現在十五歳となり、可憐な少女の香りに艶やかな大人の匂いを加えつつ有り、満開寸前の白薔薇の様な趣を湛えている。

彼女は美しいだけではない。聖母の様に優しく、慈悲深く、そして誰にでも、どんな時にも笑顔を絶やさずに向ける。

彼女の微笑みは俺達の誇りであり、それを消す者は何人たりとも赦せない。

その彼女が涙を流している。俺と相棒はガタ、と立ち上がった。

「お嬢様、どうなさいました？何でも言つて下さい…この俺に…」
モンキーが吼える。調子の良いヤツだが頼りになる相棒だ。

「…あのね、助けて欲しい女の子が居るの」

俺はそれが誰だかピン、と来た。

お嬢様は現在、とある名門女子校に通つていて。

通学途中、余り治安の良くない地区も通るので送り迎えの車には俺
か相棒が必ず同乗する。

その治安の良くない地区を通る時、お嬢様は一生懸命窓の外を凝視
し、

何かを探し、見付けると輝くよつた微笑を見せ、見付けられないと
寂しそうに俯く。

お嬢様の視線を独り占めするその相手は、黒目黒髪の少女だった。
その少女は小さな子供達を集めて遊んでやつていたり、犬猫の中心
で戯れていたり、

時には近所の子を預かりでもしたのか、赤ん坊を背負つている事も
有る。

お嬢様の彼女を見る視線は、おそらく憧れだろう。

裕福な家に縛られている自分に無いものを彼女に感じている。
また、いつも子供や動物に慕われている少女に深い優しさを感じて
いるのだろう。

お嬢様が本当に信頼できるのは、今の屋敷の使用者と、後は父親だけであるから…。

そして、意を決したお嬢様は今日の学校からの帰り道、少女に声を
掛ける為に車を停めさせた。

しかし、少女はお嬢様が車から降りる寸前に数人の少年に囲まれ車
に乗せられ、連れて行かれた。

「女の子？ご友人ですか？」モンキーが聞く。

お嬢様は首を振り、

「今は違うの。でも、お友達になつて欲しい娘なの…」

ルビーの瞳から、ダイアモンドの涙が零れ落ちる。

「…今日、声を掛けようとしていたあの少女ですね？」

俺がお嬢様に問い合わせると、こくん、と頷いた。

「お嬢様、いけません。あの様な娘に関わつては。ご主人様に叱られますよ」

セラがおろおろと説得する。おそらく、かなり前から説得し続けているのだろうが、

お嬢様は諦めきれずに俺達の所へ来てしまったのだろう。

「ベア、モンキー、貴方達からもお嬢様に何か仰つてください」セラが俺達に懇願する。セラに惚れているモンキーは困ったよう黙り込み、座つた。

「お嬢様、俺はあの少女の事を少し調べておきました。

彼女は現在、ある不良グループのリーダーの情婦（おんな）です。

また、恐らく今日少女を連れ去つたのは対立しているグループの連中です。

あの少女はお嬢様の思われている様な普通の少女では有りません

セラが真っ青になる。

「ベア！そんな事をお嬢様に言わなくとも…！」

俺は構わず続ける。

「お嬢様、貴女の彼女に対するお気持ちは、捨てられている野良猫を助ける程度ですか？」

もしその程度ならお止めなさい。それでは彼女をもつと傷付けるだけです

お嬢様はしつかりと俺の目を見詰めながら答えた。

「いいえ、私には解るの。あの娘はとても優しくて強い娘。

そして、本当の悲しさと辛さを知つて、それでも優しさを捨てない娘。

だから、私は彼女と友達になりたい。彼女に預けたい…」

「俺は頷き、立ち上がる。

「さて、相棒！仕事だ。行くぞ」

相棒もやれやれ、といった風情で立ち上がる。

「俺達にはちょっと理解し難いが、お嬢様と同じ

日本人の血が流れているお前にははつきり理解できたようだな」

「ベア！モンキー！」セラが声を上げる。

「すまんな、セラ。RRを廻してくれ」

俺がセラに言うと、セラも諦めたように溜息を付いた。

「悪いな、セラ。キミの頼みは天使のお願いだが、お嬢様の頼みは女神のお願いなんだ」

モンキーがヘタなフォローを入れる。

「…解りました。手配します」

「ありがとう！ベア、モンキー、大好き！」

お嬢様が俺に抱き付き、頬にキスをしてくれる。

「あつ！良いな～」羨ましそうに声を上げるモンキーにもキスをするお嬢様。

「セラにもね！」セラもキスをされ、思わずにはやけている。

「さて、ご褒美を前払いしてもらつたんだ。気合入れて行くぜ！」

五分後、俺達は車に乗り込み、俺が調べておいた不良グループのアジトである

町外れの教会の廃墟に向かつて出発した。

その教会は荒れ果てており、屋根の上の十字架は既に落ちてしまつてゐる。

廻りは草原であり、姿を隠すよつな所は無い。

しかし教会の前には見張りは居らず、元駐車場だつた荒地の端にRR^{ローラス}を停めても誰も気付かないようだ。

「お嬢様、待つていて下さいね！あつという間に片付けて来ますから」

調子良く言つモンキー。だが、コイツは仕事上で嘘をついた事はない。

「セラ、お嬢様を頼む。二十分も有れば戻る」

「はい」

平凡と答えるセラ。

ブラウンの瞳を持つ彼女に掛かれば、不良の四・五人など物の数では無い。

「さて、行こうか相棒」

「オーケー相棒」

俺達はRRを降りると、満月を背にして教会へと足を進めた。

教会のドアを開けると、生臭い匂いがふんと鼻を突き、下半身を丸出しにした不良少年^{バカガキ}の嬌声が聞えてきた。

中は薄暗く、壁に吊るされた幾つかの懐中電灯だけが明かりの源だ。ざつと見渡した所、人数は四十から五十くらいか。

殆どが少年だが、中には女の子も数人居て、あちこちで数人掛かりで犯されている。

しかしその娘達はほとんどが仲間の様で、嫌がりもせずに受け入れている。

「ベア、どの娘がお嬢様のお気に入りだ？」

モンキーが俺に聞くと同時に、俺は目的の黒い髪を見出した。

奥の一段高くなっているステージの上、本来ならば牧師か神父が礼拝者にありがたい講話を聞かせる為の場所で

虚ろな表情になつた少女が数人の男に囁かれている。彼女の虚ろな視線の先には、碎けた十字架が有つた。俺の中にふつふつと怒りが沸いて来る。

「お前ら、いい加減にしとけよ」

俺は静かに怒りの声を上げた。

ピタ、とガキ共の動きが停止した。

男に伸し掛けられたままの黒髪の少女がゆっくつとこちらに顔を向ける。

「酷いな、こりや・・・」

少女に気付いたモンキーが呆れたように漏らす。

しかし、言葉の印象とは裏腹にそうとう頭に来ている様だ。
イタリアン
伊達男

らしく、女性に優しい相棒としてはこの状況は許せないのだろつ。

「なんだお前ら!」「殺されてえのか!-!」

「・・・不良^{クズ}同士の喧嘩なんか別にほつとけば良いんだが、お嬢様にその娘を助けてくれと泣かれちゃなあ・・・」

溢れてくる怒気をこじまかす為か、冷静さを裝つてぼやくモンキー。

コイツもホントは正義感の強い熱い男だ。

「ゴネるなよ相棒。お嬢様のお願いだ。

神を殺してくれと言われても俺は従うぜ」

俺の発した言葉に頷き、

「ま、そういう事だな」

と不適に笑うモンキー。

不良共が手に得物を持つて奇声を上げながら殺到してくる。

「時に相棒、お嬢様のキスを金に換算したら幾ら位の報酬になると思つ?」

バカな事を聞いてくるモンキーに呆れた俺が

「金で買えるかよ、バカ。プライスレスだ」と答えた瞬間、

モンキーが一人目のガキの顔面を裏拳で弾き飛ばした。

「まあそなんだがな。例えばだよ。値段を付けるならいくら位だと思う?」

俺も飛び掛ってきたガキのナイフをかわしつつ手をひねり上げて体を持ち上げ、

二、三人固まっている所に叩きつける。

奇妙な悲鳴を上げながらぶつ倒れて動かなくなるガキを踏み付けながら、

「そうだな、ヨーヨーク百万ドルくらいじゃないのか?

百万ドルの夜景と同等以上の価値は有るぜ」と答える。相棒は頷いて、

「じゃあ今夜の報酬は百万ドル以上ってことか。値段分の仕事をしねえとな」と言いながら回し蹴り一回転で数人のガキを吹き飛ばす。

「さ、黙つて仕事仕事。沈黙は金だ」

「あいよ」

俺とモンキーが仕事ビジネスモードに切り替わる。

俺達は残りの不良共を片付けに掛かる為、気合を入れ直した。

十分後、ガキ共を全て片付けた俺達は黒髪の少女に脇にしゃがみ込んだ。

「気合い入れ直す必要も無かつたな。

うあ…マジで酷えな。どうする、この状態でお嬢様の所に連れて行くのか?」

モンキーが顔を顰めつつ聞いてくる。

確かに酷い。顔こそそんなに殴られていないものの、

豊かなバストは酷く捏めたらしく真っ青なアザに覆われている。腹や尻も所々アザが出来ており、右足脛と右手首は骨折している様で

あらぬ方向に曲がっている。そして、何よりも女の大切な所と肛門から酷く出血している。

俺は自分のジャケットを脱ぎ、彼女に羽織わせると、軽い体を抱き上げた。

片隅で固まり、震えている娘達に

「もう一度同じ事をしたら、今度は皆殺しにすると言つておけ、良いな」

と凄むと、娘達は力ク力クと機械的に頷いた。

「うん、あんた達、誰なの？」

黒髪の少女が聞いてくる。中々の美形だ。おまけにいい肉体おっぱいしてやがる。

「なんか、日本人っぽいがハーフかクオーターか？」

「解った、死神でしょ？」真っ黒だもん…」

「良いから喋るな。俺達は女神様の使いだ」

「え？」

俺とモンキーがRRに辿り着くと、セラが外で待っていた。

「お疲れ様でした。

「まあなんて酷い…濡れタオルを持ってきているからちょっと待つてね」

さすがナチュラルメイド、やる事に隙が無いな。

「ベア、モンキー、お疲れ様でした。ありがとうございました！」

ね、早く車に入れてあげて」

お嬢様が窓から顔を出して懇願する。

俺達は少女をリアシートに寝かせた。

「大丈夫？」

お嬢様が少女の顔を拭いて上げながら真紅の瞳で覗き込む。

「…あんたは、天使様？ あたしを迎えてきたの…？」

少女はお嬢様を見て驚いた様な声を上げつつ、気を失った。

「な、相棒。やっぱ天使様に見えたらしいぞ」

モンキーが感心したように言う。

「ああ、当然だろ。俺だつたら嬉しくて死んじまうぜ」
掛け合いでいる俺達を呆れたように見ていたセラが、
「ほり、帰りますよ。地獄から天国へね」
とつまらない冗談を言ったのには驚いたが。

一人の天使とその下僕と、天使に助けられた子羊を乗せたRRは
天国へと帰るために闇の中へ滑り込んだ。

屋敷に戻り、娘を医務室に運ぶ前に浴室へ連れて行く。
メイドを数人呼んで娘の体を洗わせ様としたが、

「大丈夫、私とセラでやります」

と言つお嬢様が一生懸命少女を洗い、

綺麗になつた少女をバスタオルに包んで運び
医務室のベッドへ寝かせた。

屋敷付きの女医が丁寧に診察している間、

俺は廊下のソファに腰掛けてエスプレッソを三杯飲み干した。
時間は午前三時、モンキーは仮眠室へと消えた。

「診察と手当ては終りましたので、私は仮眠します」

診察を終え、医務室から出てきた女医に会釈をしてから
入れ替わりに医務室へと入ると、

お嬢様が少女の左手を握り締めながら座つて
改めて少女の顔を見ると、綺麗な顔立ちをしている。

あんなガキ共にやあ勿体無えな。

それにもしても、本当に日本人っぽい顔立ちだよな。

「ベア、本当にありがとう。

女医のお話では、あのまま放置されただら
命が危なかつたかもしだれないって…」

お嬢様の瞳からキラキラと宝石が零れ落ちる。

あれを固形化して売つたら、きっと大金持ちになれるなど
バカな事を考えてから思わず苦笑する。

「それは良かつた。しかしお嬢様、この少女をこれからどうするの
ですか？」

俺は懸念していた事を聞いてみる。

「…私のお友達になつてもらひの。

それで、この娘がもし承知してくれたら、家で引き取つて一緒に暮らしたいと思ってるわ。もちろん、お父様にお願いしてね

なぜ、この娘にそんなに拘るのか？

俺の表情を見て、まるで心を読んだかのようにお嬢様は話しあした。

「私はいつも、この娘の事を追つていきました。

彼女はとても優しくて、そして強い娘です。

いつも彼女の周りには子供や動物が集まつてきいていました。

それに、彼女はご老人や妊婦さんにとっても優しく接していたの。

彼女はきっとご両親やご家族が居ないのでしょう。

彼女は弱き者達に限りない優しさを向ける事が出来て、

そして本当の哀しさと辛さと涙を知つてゐるから

弱い人達は彼女の前で心を開く…

貴方やモンキーは私の事を天使とか女神とかつて褒めてくれるけど、

本当の天使や女神は私みたいに恵まれた立場には居ないのよ。

自分が一番辛いのに、それでも他の弱いモノに優しく出来る…

そんな、この娘の様な人こそが本当の女神なの

…俺は心の底から驚き、そして感動していた。

確かに、俺もモンキーもお嬢様の優しさは本物だと知つていたが、少なくとも経済的には一切困る事の無い、

文字通りお嬢様としての優しさが主な成分だと思っていた。

もちろん、そういう環境の中で弱者を思いやれる優しさを持てる事が

現実では非常に稀有な事であるのは、世界中の富がごく一部の人間に集中して、

その連中が富を本当の意味で弱者に分け与える事を絶対にしない事を見れば一目瞭然だ。

しかしお嬢様は、その稀有な資質を備えた上で更に底辺に居る人間

の、

僅かしかモノを持たない人々がそれを分け与える事の優しさを理解している。

…ああ、この娘は、まさに聖母マリアなのだ…。

「…お嬢様、失礼しました」

バツと頭を下げる俺に「え？」と不思議そうな顔を向けるお嬢様。俺は、お嬢様の為ならば本当に命も要らないな。

例え世界中がお嬢様の敵となろうとも、俺だけはお嬢様の為に闘う事を誓おう。

ふと壁際に控えているセラを見ると、うんうんと誇らしげに頷いている。

彼女は俺の謝罪の意味を理解した様だ。

「…？ええと、ですから、この娘はその本当の優しさを持っている娘なんですね」

だから、彼女がもし承知してくれたら、私の大切な…妹を預けたいのです

「妹君、ですか」

俺の脳内に三人の娘の顔が現れる。いずれもお嬢様とは腹違いの姉妹だ。

直接会つた事の有るのは、末妹のレイラ様だけだが…

「どの方を、ですか？」

俺の質問にお嬢様はふつと、寂しげに微笑んだ。

「…まだ、その妹はこの世に生まれてきていません…」

「え！？それでは、奥様がご懷妊なさつたのですか？」

美しいが、人を見下している様な表情を浮べている女主人の顔が脳裏に閃く。

「…いいえ、違います。お義母様がお生みになるのでは有りません

…」

「…ですか」

これ以上は俺に伺う権利は無い。

おそらくご主人に新たな愛人でも出来たのだろうが…。
「とりあえず、彼女が目を覚ますまではお預けですね」

ワインクするお嬢様。

「ベア、貴方も休んで下さい。セラ、貴女もね」

「「いいえ！…」」

俺とセラがハモつた。

「…ベア、お先にどうぞ」「いや、セラこそ…」

発言を譲り合う俺達にお嬢様が「ロロロロ」と笑う。

「じゃあ、三人で起きてましょう。誰が一番先に眠るか勝負ね！」

俺とセラは顔を見合わせて苦笑した。

間もなくお嬢様は、少女の左手を握り締めたまま愛らしい寝息を立てて眠ってしまった。

セラがお嬢様にタオルケットを掛けて上げている。

セラもかなり眠そうだが、壁際の椅子に腰掛けて欠伸をかみ殺しながら耐えている。

「セラ、キミはもう休め。朝が辛いぞ」

俺の言葉にセラは頭を振る。

「お嬢様がベッドに入つてお眠りにならない限り、私がベッドに入るわけには行きません。

それより、ベアこそ大丈夫なのですか？ 昨晚、雑魚とはいえあれほどどの人数を

叩きのめしているのですから運動量は結構有つたのでは無いですか？」

「…まあ、俺はこういう状況には慣れているからな[△]」

セラがマジマジと俺の顔を見ている。

「…ベア、もし宜しければ貴方の今までのお仕事や人生について少しでもお話して下さいませんか？ 貴方は、ただのボディガードとは

一線を画していると思えるのです」

俺はセラの目をじっと見詰めた。

そこには興味本位と言うよりも、お嬢様の身を護る人間として同僚の正体を知つて置きたい、という気持ちが読み取れた。

「…少しだけならな。俺は実は日本人だ」

「えっ！」

いきなりセラが驚いている。

「…」、「ごめんなさい。続けて」

「その前に、俺が日本人じゃおかしいか？」

「…日本人からは、貴方の様な匂い… そうね、言うなれば火薬の匂い、

とでも言つ危険な匂いは一度も感じた事が無いから…」

遠慮がちに言つセラ。

「なるほど。まあ大多数の日本人はそんな感じだな。
だけど俺はそれが退屈だった、命を掛けて、世界中を廻つてみようと思った。

その為には何が必要か。どんな危険な国や地域に行つても

生き残れるだけのスキルが必要だ。

そのスキルとは、戦闘能力、生還能力、技術力に大別される。

そしてそのどれが欠けても生き残る事は難しくなる。

だから、それを鍛える為に就職先に軍隊を選んだのさ

「それで、その匂いが染みたつて訳ね」

セラが感心する。

「ああ。だがな、軍隊で身に着けた能力は強勒だが、生き残つた人間は

退役してからもその能力を発揮できる職を探しちまう。

そして色んな仕事をして給料を貰う様になつたのさ^{サラリ}。

で、行き着いたのがこの仕事つて訳だ」

「なるほど、ね。でもこのお屋敷に勤めた切つ掛けは何？」

俺はふつと笑い、「それはな…」とセラに説明を始めようとした時のことだ。

「う…ん…」

黒髪の少女が呻きながら目を開けた。

「痛つ！」

声を上げて苦しそうに目を瞬き、焦点を合わせている。

俺とセラが黙り、様子を見ていると自分の左手を握り締めたまま眠っているお嬢様に気が付いた様だ。

頭を必死で動かしてお嬢様を見て、驚きの色を浮べている。

「ここ、天国、かな？」

俺とセラは噴き出しそうになつたが、黙つて我慢した。

その時、お嬢様もふつと目を覚ました。

「気が付いたのね：大丈夫？」

お嬢様が少女の手を握り締めながら問い掛ける。

「…ここは、どこ？ あなたは、誰なの？」

少女はかなり戸惑つている。

「ここは私のお家。私は、アイシャ。貴女とお友達になりたくて、私の友達に貴女を助け出してくれる様にお願いしたの」

俺はその言葉に、胸が熱くなるのを感じた。

「…え？ どういう事？」

少女は更に戸惑つてしまつた様だ。

アイシャ様がこんこんと説明を始めた。

説明を聞いている内に、少女の顔が険しくなつてくる。

やはり、少女は傷付いてしまつた様だな。

さて、どうなるか。

「つまり、あなたは私を憐れに思つて助けてくれたつてワケね」「黒い瞳に燃える様な色を見せながら少女が声を絞り出す。

「違うわ、そんな積りじゃないわ」

「助けてくれた事には感謝してる。ありがとう」

「だけど、憐れみなんか欲しくなかつた！ あなたは恵まれたお嬢様。

あたしは、あなたにとつて野良猫みたいなモノなのよね！」

あたしはあんたなんか想像も付かない様な生き方をしてきたわ。
ヴァージン 処女 を失くしたのは九歳の時。

あんた、セックスつて知つてる？

あんたみたいなお嬢様はまだ言葉も知らないんじゃないの！？

あたしのクソみたいな人生なんて想像つかないでしょ！」

汚い言葉で罵詈雑言を尽くす少女。

アイシャ様は悲しそうな顔をして黙っている。

俺もセラも口を出したいのは山々だが、お嬢様が黙つている限り

俺もせこせこ口を出されには行かない

少女はしにぐく怒鳴り罷りし
苦しくなつたのか肩で息をしたが
黙つた。

その時、突然アイシャ様の右手が一閃した。

少女の頬かバン！と音を立てる

俺もセラセラ、そして少女も余りの事に言葉を失し固まつた。あのアイシャ様が、少女を引っ叩くとは……！

「ダメだしさ。助けてやったときになら aNHi って言わなき
や
」

「貴女は本当は優しくてか弱い娘。私には解るの・・・」

リビの横な瀬織の瞳から、夕イリの横な涙を零しながら、少女を抱き締めるアイシャ様。

少女の漆黒の瞳からも涙が零れだす。

「えつ……ふえつ……つあ——ん——ん！」

少女がまるで子供の様に声を上げて泣き出した。

アイシャ様は更にぎゅうと力を込めて少女を抱き締める。

「アーニー、お前がアーニーの名前を知らなかったのか？」

セラが俺を見ながらからかう様に言つた。

卷之三

俺は一言たゞに言し返す

それ以上言葉を出すと涙声になってしまふ。「た、たかこた

その後、マキと名乗ったその少女は屋敷に引き取られ、

アイシャ様付きのナチュラルメイドになる事を決意してセラの指導の下で基本的な勉強を始めた。

俺とモンキーも護身術や一般常識などの教師として駆り出されてしまつたのは計算外だつたが…

元々頭は良かつたのと、アイシャ様への崇拜に近い感情を持つて必死で頑張り

マキは半年程でかなりの能力を身に付け、ご主人の叔父上マスターが学長をしている

日本の女子学園に特別生徒として入学する事になった。

まあ、マキを取り返しに来た不良仲間を一掃したり、

その上のチンケなギャングと一悶着起きて結局俺とモンキーで壊滅させたりと

少々騒がしい事態も起つたが、それはまあ大した事じゃない。

そしてマキを日本へ送り出した後、セラと一人でパブでささやかな祝杯を挙げた。

モンキーはマキとマキの付き添いのメイドを日本へ送り届ける為に付いて行つた。

乾杯の後、「ねえ、あの時の質問の答え、まだ聞いてなかつたんだけど?」

とセラに言われた俺は、「ああ、なぜ今の屋敷に勤めたかつて事か?」と聞き返す。

ワインを飲みながらこくん、と頷いたセラに俺は答えた。

「俺がこの屋敷の前を通り掛つたとき、窓からアイシャ様が覗いててな、

俺にウインクしてくれたんだ。それで、一目惚れしちまつてな「呆れた様に肩を竦めるセラ。

本当の理由は、その内話せるだろ?」

さあ、明日からまた、アイシャ様の為にガツチリ仕事するか！

「乾杯！」「かんぱーい！」

俺とセラは、俺達の女神の為にもう一度乾杯をした。

（完）

フェルダムト！』EP・00 ガーディアン・オブ・ミューズ

1

Final . (後書き)

Ending Image Song : Honesty

Artist : Billy Joel

Special Thanks to J・J

Presented by Shogo Hazawa

ご愛読ありがとうございました。

フェルダムト！シリーズはまだまだ多くのHピソードがありますので、随時執筆予定です。

ご期待下さい！

また、ノクターンノベルズにて連載中の、本作と関連が深い拙作「

真夏の夜の夢」も合わせてお読み頂ければ幸いです。

但し、「真夏の夜の夢」は18歳未満の方はお読みになるのを「遠慮下さいませ。

それでは、またお会いしましょ。

作者より、全ての読者へ感謝を込めて…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7650c/>

フェルダムト！EP.00 G.O.M 1 紅瞳の天使と黒髪の少女

2010年10月10日05時48分発行